

## はじめに

「論語読みの論語知らず」という諺ことわざがあります。「書物に書いてあることを知識として持っているだけで、それを実際に生かして使うことができない」という意味です。この諺は日本で生まれたものであり、中国の故事成語ではありません。日本人にとって『論語』が書物、そして知識の象徴であったことがわかります。

落語やお芝居の台詞せりふに「あいつは火の玉喰う、火の玉喰うって言ってるから、赤くなるかと思えば、青くなってやがる」というのがあります。この「火の玉喰う」は「しのたまはく」、つまり「子曰く」の駄洒落になっています。江戸っ子は「ひ」を「し」と発音しますから、「しのたまはく」で「火の玉喰う」という意味にもなるわけです。この駄洒落になった「子曰く」は「孔子が言われた」という意味で『論語』の中にたくさん出てくる表現です。落語の中にさえ出てくるわけですから、昔から『論語』を読むことが庶民にまで浸透していたかがわかります。

「朋有り遠方とほより来る、亦たまた楽しからずや」とか、「三十にして立つ、四十にして惑まどわず」といえば、どこかで聞いたことがあるはずですが、私たちは仏教の経典の言葉は知らなくても、儒教の経典である

『論語』の言葉には馴染みがあるのです。日本人にとって最も身近な外国の古典といえるでしょう。

『論語』は孔子とその弟子たちの言行を記した書物で、編纂は孔子の没後、弟子やまたその弟子の手によるとみられ、完成したのは前漢の初めごろ（紀元前二世紀）とみられています。儒教の経典をまとめて「四書五経」と呼びますが、その「四書」の一つ（ほかには『大学』『中庸』『孟子』があります）として古来読み継がれてきました。

本書は『論語』を漢文で読んでみようとするものです。『論語』をはじめとする中国の古典が私たち日本人に浸透したのは、漢文訓読という技術があったからです。外国語で書かれている文章を日本語として読みこなそうとして生まれたのが「漢文訓読」です。本来漢字だけが並んでいるものに、私たちの先祖は句読点を付け、さらに返り点や送り仮名を付けて読んできたのです。この「漢文訓読」の方法を使って『論語』の原文（白文）に挑戦してみましょう。本書では、どう読めば意味が通じるのかを考えながら返り点や送り仮名を付けて読んでいく、という伝統的な訓読の方法を解説していきます。そのため本書では『論語』の中から漢文訓読の修得に役立つ文章を選びました。

第一部では返り点、送り仮名を付けた文章を読みます。まず訓読の方法に慣れましょう。訓読の基

本は音読です。是非声に出して読んでみましょう。漢文の訓読を感覚として身に付けていってください。

い。

第二部では返り点や送り仮名のない白文（句読点は付けました）を読んでいきます。一つ一つの漢字の意味、そして文意をじっくりと考え、自分で返り点や送り仮名を付けながら読んでいきましょう。はじめは難しいと感じるかもしれませんが、一つ一つ読み進めていくと徐々に解説なしでも読めるようになるはずです。

本書は、漢文で『論語』を読んでみるということが主眼なので、『論語』の内容についてあれこれと論じることはしません。『論語』を漢文で読んでみて、それぞれの文章の意味はご自身で味わってください。

白文を読むことは難しいことですが、少し読めるようになってきます。二千年以上前に書かれた文章を漢文訓読という方法を使えば現代の私たちが読むことができるのです。さあ漢文を読みましょう。

二〇一〇年四月



幸重敬郎

## 文章1 ◆ 朋有り遠方より来る

子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋  
自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、  
不亦君子乎。

卷第一 学而第一

この文章は、あまりにも有名なのでみなさんの中にもすらすらと読める方もいらっしゃると思いますが、最初なので一文ごとに読み方を確認していきましょう。

子曰、学而時習之、不亦説乎。

「子曰」は「しいはく」と読みます。「子」は孔子に対する尊称なので「し」と読みます。「曰」は「言った」という意味で「いはく」と読みますが、「おっしゃった」と尊敬の意味をこめて「のたまはく」と読んでもかまいません。本書では「いはく」で統一します。また「曰」は「曰はく」と「は」から送り仮名にしてもかまいません。

## ◆ 接続の置き字「而」

「学而時習之」は「まなびてときにこれをならふ」と読みます。ここで読まない漢字がありました。「而」です。漢文では読まない漢字のことを「置き字」と呼びます。「而」は接続詞のはたらきをする置き字です。「而」はその前にある「学」に「て」と接続助詞を付けるはたらきがあります。なので「学而」で「まなびて」と読むのです。「習之」で「レ点」が使われています。「レ点」は一文字下から上にもどって読むときに使います。

## ◆ 詠嘆の句形

「不亦説乎」は「またよろこばしからずや」と読みます。「説」には「悦」と同じ意味があるので

「よろこぶ」と読みます。「不亦——乎」の形は詠嘆の句形といいます。かならず「また——ずや」と読んで「なんと——ではないか」と訳します。「なんとうれしいことではないか」と訳します。ここで「二二点」が使われています。「二二点」は二文字以上で下から上にもどって読むときに使います。また「亦た」は「た」と送り仮名を付けずに「亦」と読んでもかまいません。次の文にいきましょう。

有<sup>リ</sup> 朋<sup>ニ</sup> 自<sup>リ</sup> 遠<sup>ル</sup> 方<sup>ニ</sup> 来<sup>ル</sup>、不<sup>ニ</sup> 亦<sup>タ</sup> 楽<sup>シカラ</sup> 乎。

「有<sup>リ</sup> 朋」は「ともあり」と読みます。「自<sup>リ</sup> 遠<sup>ル</sup> 方<sup>ニ</sup> 来<sup>ル</sup>」は「えんぼうよりきたる」と読みます。「自」には「より」と読んで「——から」という意味があります。「来」は「くる」と読むのではなく漢文では「きたる」と読みます。「不<sup>ニ</sup> 亦<sup>タ</sup> 楽<sup>シカラ</sup> 乎」は「またたのしからずや」と読みます。直前の文と同じく詠嘆の句形が使われています。「なんと楽しいことではないか」と訳します。

人<sup>シテ</sup> 不<sup>レ</sup> 知<sup>ラ</sup> 而<sup>レ</sup> 不<sup>レ</sup> 慍<sup>ウラミ</sup>、不<sup>ニ</sup> 亦<sup>タ</sup> 君<sup>ナラ</sup> 子<sup>ナラ</sup> 乎。

「人<sup>シテ</sup> 不<sup>レ</sup> 知<sup>ラ</sup> 而<sup>レ</sup> 不<sup>レ</sup> 慍<sup>ウラミ</sup>」は「ひとしらずしてうらみず」と読みます。「而」に注意してください。直前の「知らず」に「して」と付けるのは置き字「而」のはたらきです。「慍」は難しい漢字ですが「うらむ」

と読んで「怨」と同じ意味です。ただし「怒」と同じとみて「いかる・いきどほる」と読む説もあります。「不<sup>ニ</sup> 亦<sup>タ</sup> 君<sup>ナラ</sup> 子<sup>ナラ</sup> 乎」は「またくんしならずや」と読みます。やはり詠嘆なので「なんと君子ではないか」と訳します。「君子」とは「徳のある立派な人物」です。

是非声に出して読んでみましょう。

※書き下し文（ふりがなにはすべて古典的仮名遣いを用いています。）

子曰く、学<sup>ビ</sup> びて時<sup>ニ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 習<sup>フ</sup> ぶ、亦<sup>タ</sup> 説<sup>バ</sup> ばしからずや。朋<sup>アリ</sup> 有<sup>リ</sup>、遠<sup>ク</sup> 方<sup>ヨリ</sup> 来<sup>ル</sup>、亦<sup>タ</sup> 楽<sup>シ</sup> しからずや。人<sup>ヲ</sup> 知<sup>ラ</sup> ずして慍<sup>ミ</sup> ず、亦<sup>タ</sup> 君<sup>ナラ</sup> 子<sup>ナラ</sup> ならずや。

※現代語訳

孔子が言われた、学んでそのことを適当な時期におさらいする、なんとうれしいことではないか。友だちが遠い所から訪ねてきてくれる、なんと楽しいではないか。人が（自分のことを）わかってくれなくても気にかけない、なんと君子ではないか。